

中  
2021

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で22ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

(第1回)

受験番号	
氏	名
	ふりがな



一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

夏休みの宿題には、まだほとんど手をつけていない。やらなければいけないのは、わかっている。特に工作。去年までは「今年だけだからな、特別サービスなんだからな」と手伝ってくれていた父は、今年はいない。

部屋の片付けもしなくてはいけない。ゆうべも「ゴミ捨て場みたいじゃない！」と叱られた。一日おきのお風呂掃除当番も、このところずっとサボっている。夏休みに入ったばかりの頃は「洗濯はぼくがするからね」と言って母を喜ばせていたのに、洗濯機を回すのも洗濯物を干すのも、結局ぜんぶ母任せだった。

ほんとうは、ないしょで庭の草むしりもしようと思っていた。きれいになった庭を見たら、口癖のように「庭の手入れしなくちゃ」と言っている母はびっくりして大喜びするはずなのに、庭は雑草が伸び放題のままで、夕方になるとヤブ蚊が部屋にどんどん入ってくる。

がんばりたい。お母さんを助けて、お母さんを喜ばせてあげたい。それは、絶対にほんとうの気持ちだった。でも、いざなにかをしようとすると、急に億劫① おっくうになってしまう。体も、心も、だるい。

宿題タイムが終わるのを待ちかねて、児童公園に向かった。サドルからお尻を浮かせて自転車をとばしている、しだいに胸がどきどきしてくる。「わくわく」とは微妙に違う、自然とうつむいてしまう②「どきどき」だった。公園では、下級生が数組のグループに分かれて遊んでいた。少年に気づいた一人が「ケンタクくん、こんちはッス」とおじぎした。別のグループの子も「ドーもッス」と挨拶あいさつした。でも、誰も近づいてはこない。あわてて目配めくばせをしあうグループや、遊びをやめてみんなで集まり、ひそひそと相談を始めるグループもある。

少年は自転車にまたがったまま、公園を眺め渡した。

胸のどきどきが、すうっと消える。

今日も誰もいない。下級生はたくさんいるのに、五年二組の同級生の姿はどこにもない。カズアキもマサヤもシヨウタもダイスケもノリちゃんも……仲良しの友だちはみんな、駅前にある進学塾の夏期講習に通っている。

最初からわかっていた。夏休みに入ってからずっとそうだ。みんなが集まって遊んだ日はまだ一日もないし、夏休みの後半もたぶん無理だろう。夏期講習が休みの日にも、家族で旅行をしたり海水浴に行ったりで、みんな忙しい。わかっているのに、今日もまた、どきどきした。それが<sup>③</sup>悔しくて、蹴<sup>け</sup>飛ばすように自転車のスタンドを立てた。

「よお、ちよつとそれ貸せよ」

サッカーをして遊んでいた下級生に声をかけた。三年生のグループだ。公園に入ってきた少年を見て、そろって目をそらしたグループでもある。

「すぐ返すから、ほら、貸せって」

いやだ——とは、言わせない。

グループの一人が力なく蹴ったサッカーボールが、足元に転がってきた。「手で持ってこいよ、バーカ」と少年が言うと、みんな、ひやっと<sup>④</sup>肩をすくめる。「怒ってねえよ、バーカ」と笑って言っても、誰も笑い返さない。目も合わさない。かわりに、声をかけられなかったグループはほつとしたように、また遊びを再開した。

少年はボールを軽くトラップして、小走りでドリブルを始めた。進む方向にいる下級生は、あわてて道を空<sup>あ</sup>ける。そのあわてつぷりがおもしろくて、みんなの中を突っ切るようにドリブルをつづける。

ボールを蹴る。追いかける。また蹴る。また追いかける。息をはずませてドリブルをつづけていけば、体と心のだるさを忘れられる。でも、頭がからっぽになるほどではない。へ A へずっと、友だちのことを考えてしま

夏期講習に行くとは最初に言い出したのはダイスケとノリちゃんだった。二人は私立中学を受験する。志望校は市内でいちばんレベルの高い山手学館だった。ダイスケによると、山手学館を目指すなら五年生の夏休みから受験勉強を始めるのがぎりぎり、まじめなヤツらは四年生のうちから塾に通っているらしい。マサヤとシヨウタも、お父さんやお母さんと相談して、山手学館は無理でもどこか私立を受験することに決め、夏期講習に通うことになった。すると、勉強が人並み以下しかできないカズアキまで「じゃ、オレもやろうつ」と調子に乗って申し込んだのだ。

ドリブルをつづける。Tシャツの背中汗でびっしょり濡れてきた。下級生の邪魔をするのにも飽きて、公園のフェンスに沿って走る。それでも何周目だろう。パスをする相手がいないうドリブルなんて、ちつともおもしろくない。急に腹が立つてきて、ボールを公園の真ん中に蹴り込んだ。せつかく返してやったのに、さっきのグルーブはジャングルジムを使った鬼ごっこに夢中だった。

自転車を適当に乗り回し、コンビニでしばらく涼んでから、家に帰った。時刻はようやく正午になったところだった。昼食の弁当は、予想していたとおり、朝食のオカズにピーマンの炒め物を足しただけだった。

テレビの高校野球は、二試合目の終盤に入っていた。ワンサイドゲームで、全然盛り上がらない。弁当を食べ終えると居間の畳に寝転がって、座布団を抱きかかえてごろごろと寝返りを打ちながらつぶやいた。

「学校、早く始まんねえかなあ……」

小学校に入学して五回目の夏休み——九月が待ち遠しく感じられたのは、今年が初めてだ。

目をつぶる。寝ちゃおう、と決めた。時間をつぶすには昼寝がいちばん簡単だし、とにかく、だるい。

まぶたのつくった薄闇に、ダイスケたちの姿が浮かんだ。夏休みに勉強とかよくやるよ、中学は義務教育なのになんで受験しなくちゃいけないわけよ、信じらんねえ、ワケわかんねえ……。一学期が終わる頃、そんなふう

に言ったことがある。ダイスケとノリちゃんは笑うだけだったが、カズアキはムキになって「パーカ、ケンタ、知らねえのかよ、公立とか行ったら人生マジ終わっちゃうって、カネかかってでも私立行つたほうが得なんだよ」と言い返した。ほんとうにそうなのだろうか。よくわからない。もともと勉強は嫌いだし、将来のことなんて考えたこともない。ただ、ウチはもう私立中学には行けないだろうな、ということだけは、考えなくてもわかっていた。

「今年はまだいいんだよ」ダイスケは言っていた。「来年の夏休みなんか、地獄の合宿もあるんだから」

来年の夏休みも、一緒に遊べない。いや、その前に、五人とも二学期から塾に通うので、普通の日もあまり遊べなくなってしまうだろう。友だち、解散——違うじゃん、五人はくつついてるから、オレだけ脱落じゃん、と座布団に顔を押しつけて言った。

つけっぱなしのテレビから、試合終了のサイレンが聞こえた。庭のほうでセミも鳴きだした。

昼寝はあきらめた。午後一時。弁当箱洗わなきゃ、宿題しなきゃ、部屋の片付けしなきゃ、庭の草むしりをしたらお母さん喜ぶよな百パーセント泣いちゃうよな……と思いつつ、のろのろと立ち上がる。千円札を半パンのポケットに入れて、家を出た。

一人でさんざん自転車を乗り回したすえに、学校のグラウンドを覗いてみた。フツーに仲良しの連中がいれば遊ぼう。あまり仲の良くないヤツでも、今日は特別に遊んでやってもいい。そう決めていたのに、五年生は誰もいなかった。ソフトボールをしている六年生に頼んで、入れてもらおうか。一瞬思ったが、どうせ外野しか守らせてもらえないし、攻撃のときも「DH制だから」と打席には立たせてもらえないので、やめておいた。

結局、行き場は児童公園しかなかった。

「アイスおごってやるから、ついてこい」

公園にいた下級生から三人選んで、声をかけた。四年生が一人に三年生が二人。一人百円で、自分のも入れて四百円——夕食を六百円以内の弁当にすればいいだろう。昨日もおとといもそうした。

文句は言わせない。「買い食いしたら先生に怒られるから……」と断った四年生も、「いいからこいよ」とらむと泣きだしそうな顔になってうなずいた。

自転車を漕ぎながら、何度も後ろを振り向いて、三人がついてきているかどうか確かめた。【 X 】【  
いままでおごったことのある下級生は誘わなかったし、コンビニに入ってから、「おまえのクラスの担任、誰だよ」「野球、どこのチームが好きなんだよ」「三年生で流行<sup>はや</sup>ってるゲームとか、どんなのだよ」「おまえら、ムカつくヤツがいたらオレに言えよ、ぶつとばしてやつから」……途切れる間もなく三人に話しかけた。

コンビニの前の駐車場で、アイスを食べた。アスファルトの照り返しが、まぶしくて、熱い。夏期講習の教室は冷房が効いているだろう。でも、授業中にアイスなんて食べられないだろう。

ゆつくりと時間をかけて食べたかったが、アイスはどんどん溶けていく。三人も黙々と、早食い競争みたいに休む間もなくアイスをかじる。

「よお、いまから、なにする？」

返事はなかった。「なんでもいいよ、遊んでやるよ」と言っても同じ。「オレんち、ゲームけつこうあるけど」と言ってみても、三人は黙ったままだった。児童公園に早く帰りがっている。それくらい少年にもわかる。

「アイス、もう一個おごってやる」

「……いいです、もう」

四年生が言った。三年生の二人も、そうです、もういいです、と黙ってうなずいた。

「食えよ。オレも食いたいし」

「でも……」

「いいんだよ、おごつてやるんだから文句言うなよ」

先に立ってコンビニに入った。

下級生はあとを追わず、(1)しあつて自転車に飛び乗った。「すみません、用事あるんで帰ります！」と四年生が言つて、三年生の二人も頭をぺこぺこ下げながらペダルを踏み込んで、ダッシュで通りに出てしまった。少年は<sup>⑤</sup>呆然<sup>ぼうぜん</sup>として二人を見送つた。いままでの連中と違って、遠慮深いヤツらだ。それとも、よつぽどいやだったのだろうか。本気でおごるつもりだったのに。―― Y ―― のに。夕食はおにぎり二個――それでもいいと思つていたのに。

アイスのコーナーから雑誌コーナーに移つて、午前中に読んだマンガをまた立ち読みした。宿題やらなきや、部屋の片付けしなきや、草むしりしなきや、と心の中で繰り返しながら、マンガのコマの外にあるミニ情報を一つずつ読んでいった。

やつと陽<sup>ひ</sup>が暮れた。<sup>⑥</sup>下級生におごるつもりだった三百円でバスに乗って駅まで往復したおかげで、時間をつぶすことができた。帰りのバスでダイスケたちと一緒になるかもしれないと思い、それが楽しみなのか、ほんとうは会いたくないのか、よくわからないままバスの窓から夕暮れの町をじつと見つめた。

ダイスケとノリちゃんは勉強ができるから、山手学館に受かるだろう。山手学館は大学まであるから、もう同じ学校になることはないだろう。マサヤとショウタも意外とコンジョーあるから、どこかの私立に受かりそうな気がする。カズアキはわからない。一人ぐらいダメなヤツがいてほしいような気もするが、でもやつぱり、おまえもがんばれよ、と言つてやろうか。

二学期からおまえら忙しくなると思うし、中学も別々になると思うけど、たまにはオレとサッカーしようぜ。



そう言ったら、あいつら、うなずいてくれるだろうか……。

家の近所のコンビニを出ると、空はだいぶ暗くなっていた。おなかも空いてきた。三百円でおにぎり三つ——  
ゆうべよりごちそうじゃーん、とコンビニの小さな袋を振り回して、さあ帰ろう、と通りに出た。

おとなの男のひとが、通りの先を歩いていた。

その背中を見たとき、（２）が詰まりそうになった。

思わず駆けだして、思わず声をあげた。

「お父さん！」

聞こえなかったのか、男のひとは振り向かず歩きつづける。でも、後ろ姿も、歩き方も、体型や髪型も、そっくり——だった。

お父さんはもう死んだ。もういない。いるはずがない。あたりまえの理屈が一瞬にして吹き飛んだ。

「お父さん！ お父さん！ お父さん！」

叫びながら駆けだした。全力疾走になった。足が軽い。体が軽い。まるで空を飛んでいるんじゃないかと思うほど、ぐんとスピードに乗った。

男のひとがびつくりした顔で振り向いた。

違った。

父よりも年上のおじさんで、ヘンな顔のひとで、よく見ると体型も髪型も全然似ていなかった。

へ B、ひと違いなんて、カッコ悪い。いまさら立ち止まって、ごめんなさい間違えました、なんて言えない。

「お父さん！ お父さん！ お父さん！ お父さん！」

少年はまっすぐ前を見て、遠くに向かって声をかけながら、走るスピードをゆるめずにおじさんを追い越した。

「お父さーん！ お父さーん！ お父さーん！」

前を歩くひとは誰もいないのに、叫びつづけた。すれ違うひとにアブない子どもだと思われても、どこかの家の窓からおばさんが不思議そうに覗のぞいていても、叫びながら走りつづけた。最初は恥ずかしさをごまかすためだったが、途中からは変わった。ひさしぶりに呼んだ「お父さん」が、口にも耳にも気持ちよかった。

家まであと少し。薄紫色の空に星が見えた。その星が、ゆらゆらと揺れた。今夜は部屋の片付けをしよう。今夜ならできそうな気がする。庭の草むしりをする時間はなくても、ひさしぶりにお風呂を掃除して、びっかぴかのお風呂にお母さんを「どうぞーっ」と入れてあげよう。お母さんはびっくりする。喜んでくれる。絶対に。

がんばれよお、ケンタ。

どこかから声が聞こえた。おとなの男のひとの声だった。走りながら振り向いても、誰もいない。さっきのおじさんは途中の角で曲がったのか、もう姿も見えない。

なーんだ、と笑って、また前を向いて走る。<sup>⑦</sup>ラストスパートでスピードを一気に上げる。揺れていた星が、流れ星になって、すうつと頬ほおを落ちていった。

（重松清『五年生』より）

問一 ――部①「億劫」・②「うつむいて」④「肩をすくめる」・⑤「呆然」について、本文中の意味としてふき

わしいものをそれぞれ記号で選び答えなさい。

① 億劫(おっくう)

- ア 上手くいかないと思いびくびくすること。
- イ 体中が痛くなってしまうこと。
- ウ 時間が短く感じられてしまうこと。
- エ 面倒くさくて気が進まないこと。

② うつむく

- ア 頭をたれて下を向くこと。
- イ 頭を上げ背筋を伸ばすこと。
- ウ 頭をかいて考えること。
- エ 頭をたたかれて後ろを振り向くこと。

④ 肩をすくめる

- ア 肩を突き出すこと。
- イ 肩で風を切ること。
- ウ 肩をちぢませること。
- エ 肩を回して鳴らすこと。

⑤ 呆然（ぼうぜん）

- ア 頭にきて、相手に不機嫌な態度をとるさま。
- イ 驚きあきれて、気が抜けたようになるさま。
- ウ 疲れて何もしないと決心するさま。
- エ 何も言えなくなるほど悲しくなるさま。

問二 — 部③「悔しくて」は、何に対して悔しいと思ったのか。この時のケンタの気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 朝起きるといつも、体も、心も、だるくなって、五年生の同級生や仲の良い友達が児童公園で遊んで待っていてくれるのに、間に合わなくて申し訳ないと思ったこと。
- イ カズアキもマサヤもショウタもダイスケもノリちゃんも夏休みに公園に来ないから、下級生が児童公園をおおぜいで占領し、頭に来てること。
- ウ 夏期講習が休みの日にも、仲の良い友達は家族で旅行をしたり海水浴に行ったりして、自分を誘って一緒に連れて行ってくれないのをさびしく感じていること。
- エ 五年生の同級生や仲良しの友だちが、公園に来ていないのはわかっていたけれど、もしかしたらいるのではないかと今日も期待してしまったこと。

問三 本文中の〈A〉〈B〉に入る接続語をそれぞれ次から選び記号で答えなさい。

ア では    イ でも    ウ なぜなら    エ または    オ だから

問四 【X】に入るのにもっともふさわしい一文を次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の速さについて来られないでいる。

イ 自分は強引につれてきている。

ウ 自分なりに気はつかっている。

エ 自分がつらいのはわかっている。

問五 本文中の(1)には三字、(2)には一字が入る。それぞれ本文中の2ページまでの中からさがし、抜き出して答えなさい。

問六 【Y】には、ケンタが過去にとった行動が入る。【Y】に入るのにふさわしいものを、これ以前の文章より十二字でさがし、抜き出して答えなさい。(句読点・記号は含まない)

問七

——部⑥「下級生におごるつもりだった三百円をバスに乗って駅まで往復した」行動から読み取れるケンタの気持ちとしてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア さつき帰った下級生に、もう一度会って、今度こそ絶対におごってやろうという気持ち。

イ 本心は自分でもわからないが、もしかして仲の良い友人に会えるかもしれないという気持ち。

ウ お母さんに頼まれたから、早く帰宅して宿題と部屋の片づけと草むしりをしなきゃという気持ち。

エ 三百円を使わずにそのまま家に持ち帰ったら、お母さんに言い訳をするのが面倒くさいという気持ち。

問八

——部⑦「ラストスパートでスピードを一気に上げる」とあるが、それはなぜか。

次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 知らないおじさんを「お父さん」と間違って呼び続けてしまったことに恥ずかしくなり、今、このまま止まることはできないと判断し、さらに、速いスピードでとにかくこの場を立ち去りたいと思ったから。

イ 家の近所のコンビニから出て、長い間ずっと全力で走り続けてきたにもかかわらず、お父さんに似た人を見つけた喜びから、足が軽く、体も軽くなり、まだまだ、もっと早く走れるという脚力の強さを自覚したから。

ウ いつもケンタの味方をしてくれた優しい「お父さん」の名前を呼び続けているうちに、急に、何かといつもうるさい母に対し腹が立ち、その顔を思いうかべると、自分自身の中で勢いがさらに増し始めたから。

エ 久しぶりに呼んだ「お父さん」という言葉が心地よく、走り続けているうちに、お父さんがケンタに返事をしてくれたように感じ、その声をきっかけに、心の中にためていたすべてを前向きな意志で吹っ切ろうとしたから。

問九

次の生徒A～Hの文章は、国語の授業中、クラスのグループ八人でこの作品の内容について話し合いをしたものです。本文の内容としてふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

生徒A ケンタは、今日だけでなく昨日もおととも母親から夕食代としてもらったお金のいくらかを、誰かにおごっていたんだね。

生徒B ケンタは下級生とサッカーをしたけれど、下級生が下手で、パスをする相手がないドリブルをしたのでおもしろくなかったみたいだ。

生徒C ケンタとお母さんとの毎日の生活を見ると、お父さんが亡くなったのは、ケンタが小学校四年生の夏休みに入る前だったようだね。

生徒D ケンタは、自分と同じ中学に行けなくても私立受験をする仲良しの友だちには、全員どこにかかってほしいと心から願っているね。

生徒E ケンタが、家の手伝いを毎日やろうとしてしなかったのは、自分だけ私立受験をさせてもらえないお母さんへの反抗だったんだな。

生徒F ケンタは、通りで自分のお母さんにそっくりな人を見つけたので、名前を呼んでしまったが近くで見ると全然似ていなかったんだ。

生徒G ケンタは、本当は「お父さん」が亡くなった悲しみを素直に言葉で表現したかったのに、ずっと心の中で抑えていたのね。

生徒H ケンタは仲良しの友だちがいなかったので、児童公園にいた同級生にアイスをおごったがあまり喜ばれなかったみたいだね。



二 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

雪がはげしく ふりつづける

雪の白さを <sup>①</sup>こらえながら

欺<sup>あざむ</sup>きやすい 雪の白さ

誰もが信じる 雪の白さ

信じられている雪は <sup>②</sup>せつない

どこに 純白な心など あろう

どこに 汚れぬ雪など あろう

雪がはげしく ふりつづける

うわべの白さで 輝きながら

うわべの白さを こらえながら

雪は 汚れぬものとして

いつまでも白いものとして

空の高みに生まれたのだ

その悲しみを どうふらそう

③ 雪はひとたび ふりはじめると

あとからあとから ふりつづく

雪の汚れを かくすため

純白を 花びらのように かさねていつて

あとからあとから かさねていつて

雪の汚れを かくすのだ

雪がはげしく ふりつづける

雪はおのれを どうしたら

欺かないで生きられるだろう

それが もはや

みずからの手に負えなくなってしまうたかのように

④ 雪ははげしく ふりつづける

雪の上に 雪が

その上から 雪が

たえようのない 重さで

音もなく かさなつてゆく

かさねられてゆく

かさなつてゆく <sup>⑤</sup> ⑤ かさねられてゆく

(吉野弘『吉野弘詩集』より)

\*欺く……上手にうそを言って、聞く相手に本当だと思わせる。だます。

問一 ——部①「こらえながら」とあるが、こらえているのは何か、答えなさい。

問二 ——部②「せつない」とあるが、それはなぜか。その説明として「雪の白さはくだから。」の「く」に当てはまる言葉を詩中から抜き出して答えなさい。

問三 — 部③「雪はひとたび ふりはじめると／あとからあとから ふりつづく」とあるが、なぜ「ふりつづく」のか。その説明としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雪はめつたに降らないため、一度よごれない姿を見せたら、人々の印象に残るように見せないとならないから。

イ 雪は少量だとよごれが目立つため、大量に降ることによごれの目立たない、真っ白な姿を見せることができるから。

ウ 雪は降り始めればいつも、一面の銀世界となることを期待されるため、その美しい景色を見せようと努めるから。

エ 雪は真っ白なものと理解されているので、その理解を裏切らないためには、よごれを見せることはできないから。

#### 問四

— 部④「雪ははげしく ふりつづける」とあるが、それはどうしたことを意味しているのか。次の文の空らんA・Bに当てはまる言葉を入れなさい。ただし、空らんAには詩中から抜き出し、Bにはもつともふさわしいものを後の語群から選び、記号で答えなさい。

( A ( いることを ) B )。

B ア 悔しがった    イ あきらめた    ウ 望んだ    エ 喜んだ

問五

——部⑤「かさねられてゆく。」とあるが、どのような思いでいるのか。「られ」と受け身の表現が用いられていることに注意して、その説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 予想以上に雪が降り積もっていくので、笑うしかなくなっている。
- イ どんどん降り積もり、重さが増している状況にひどく怒っている。
- ウ 自分ではどうにもならない状況となり、かなしみが深まっている。
- エ あまりにも降り積もるので、どうしたらよいかとまどっている。

問六 この詩について先生と生徒が話し合っている。次の生徒A～Dの発言の中で適当でないものを一つ

選び、記号で答えなさい。

先生 この詩は、実は合唱曲用に改作されたもので、元の詩は詩集『消息』に収められているんだ。その詩では雪が降る様子を「ひたひたと／かさなっている。」と表現しているんだよ。

生徒A そうなんです。僕は「はげしく」とあったので、勢いよく降ってくる様子をイメージしていました。でも、「ひたひたと」という方が静まり返る中、確実に降ってくる様子で、思いの強さがより伝わってくる気がします。

生徒B 私は「ひたひたと」というと、「はげしく」よりも軽く降り積もっていく感じがするので、改作されて「はげしく」という表現が使われたのは納得できます。はげしく降ってたくさん積もらないと、よごれを隠すことはできないと思いますから。

生徒C 元の詩では第一連に「誠実でありたい。」とあります。よごれを雪で隠してもそれはただ隠しているだけで、よごれ自体は消えません。「誠実でありたい。」という言葉にもどかしさを感じられます。生徒D だったら、よごれは雪が降る前にきれいにしておけばよいですね。元からよごれがなければ、雪は完全に白いままです。積もり続けられず、純白の度合いが更に増していきますからね。

三

次の文章は、レストランでの会話文です。ただし、――部①②③④の言葉つかいは不適當であるので、特に――部に気をつけて適当な言い方に直して答えなさい。

〈テーブルでの注文時〉

店員 いらつしゃいませ。

客 A Bさんは何を①召し上がられますか？

客 B 私はオムライスにします。

客 A それではメニューの②これとこれをください。

店員 ご注文を確認させていただきます。オムライスとステーキセットで③よろしかったでしょうか？

客 A はい、それをお願いします。

〈注文したメニューの提供時〉

店員 ご注文の品をお持ちしました。ステーキセットのお客様は、おはしは④ご利用されますか？

客 A いいえ、ナイフとフォークで結構です。

〈会計時〉

客 A 会計をお願いします。

店員 オムライスとステーキセットで合計二千円になります。

客 A 現金で払います。

店員 ④二千円からおあずかりします。ご利用ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております。

四

—部の漢字の読みを答えなさい。

- ①できる限り手間を省いた。
- ②僕の体は新陳代謝が活発だ。
- ③私の目は節穴ではない。
- ④彼女は悪気なく人を傷つけた。
- ⑤帰郷の都度墓参りをする。

五

—部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ①会議での話し合いはフモウに終わった。
- ②彼は徐々にトウカクを現し始めた。
- ③私腹をコやす悪い奴。
- ④感染症予防のためエイセイ管理に気をつける。
- ⑤入試までのメンミツな計画を立てた。





